朝日新聞　2009年（平成21年）11月30日　月曜日

朝をひらく

墓碑に思う

肩書で心は安らぐか

永田 円了
真国寺住職

自分をよりよく見られたい、社会的にいい評価も得たい――。人はどの時代もこの意識の虜になってきた。

富山駅から車で10分、御廟・真国寺がある。富山十万石藩主の廟所である。初代・前田利次公の墓前に立つと不思議なことに気づく。そこには「前田」という姓は刻まれていない。ちょっと長いが墓碑銘を引用する。「贈正四位侍従兼淡路守菅原朝臣利次之墓」

なぜ「前田」ではなく、「菅原」なのか。天神様で知られる菅原道真の末裔であるというブランドを前面に出したかったのか。

「富山市史」によると、明治から大正期にかけて、仏式の戒名が墓碑からすべて削り取られていることが示されている。

ちなみに、富山市の日蓮宗大法寺に保管された拓本にある、利次公の仏式の戒名は「龍光院殿前拾遺従四位瑞巌良祥大居士」。この戒名の中にも官位が入っていることに注目したい。墓石の改刻は、初代～11代藩主の墓碑すべてであった。高さ3メートル、重さ1トンもあろう花崗岩の墓石の表面が、1センチ以上削り取られている姿は痛ましい。

そこまでして「菅原朝臣」を名乗りたかった理由は何だろう。尾張の土豪の四男に生まれた前田利家（加賀百万石の藩主）の家系より、平安時代に従二位右大臣まで務めた菅原道真の家系を名乗った方が格付けが上がると考えたのだろうか。社会の評価をもっと得たいという気持ちは、時代を超えて果てしなく続くものなのか。うぅ～ん、とため息が出る。

時代は現代、戦後の団塊世代はとにかく頑張ってきた。社会で認められたいと、人を押しのけるようにして進んできた。ある人はカラオケで「マイ・ウェイ」を歌うように、「どうだおれは」とサクセスストーリーを誇らしげに語る。

そもそも人は自分の価値を何をもって決めようとしているのだろうか。自分の価値を、名刺の肩書や社会的評価に委ねている限り、心の安らぎは遠のく。

仏（ほとけ）の語源はいくつかある。私のお薦めは「解け（ほどけ）」である。私の世代の多くは、人と自分を比べ、競争の末に、一喜一憂のシーソーゲームに明け暮れた。疲れる。実に疲れる。

もし、この見えない束縛を「解く（ほどく）」ことができたなら、本当の自分を生きられるのに。自分の価値は人に判断されるほど軽いものではないはずだから。